

障子の落書

寺田寅彦

青空文庫

平一は今朝妹と姪めいとが国へ帰るのを新橋まで見送つて後、なんだか重荷を下ろしたような心持になつて上野行の電車に乗っているのである。腰掛の一番後ろの片隅に寄りかかつて入口の脇のガラス窓に肘をもたせ、外套の襟の中に埋るようになって茫然と往来を眺めながら、考えるともなくこの間中の出来事を思い出している。

無病息災を売物のようにしていた妹婿の吉田が思いがけない重患に罹つて病院にはいる。妹はかよわい身一つで病人の看護もせねばならず世話のやける姪をかかえて家内の用もせねばならず、見兼ねるような窮境を郷里に報じてやっても近親の者等は案外冷淡で、手紙ではいろいろ体ていの好い事を云つて来ても誰一人上京して世話をするものはない。もとより郷里の事情も知らぬではないがあまりに薄情だと思つて一時はひどく憤慨し人非人のように罵つてもみた。時にはこれも畢ひつきょう竟妹夫婦があんまり意気地がないから親類までが馬鹿にするのだと独りで怒つてみて、どうでもなるがいいなどと棄すてばち鉢な事を考える事もあつたがさて病人の頼み少ない有様を見聞き、妹がうら若い胸に大きな心配を抱いて途方にくれながらも一生懸命に立働いているのを見ると、非常に可哀相になつて、役所の行き帰りには立ち寄つて何かと世話もし慰めてもやる。妻と下女とをかわるがわる手伝いにやつ

ていたが、立入って世話しているとまた癩にさわる事が出来て、罪もない妹に当りちらす。しかし宅へ帰って考えるとそれが非常に気の毒になって矢も楯もたまらなくなる。こんな工合で不愉快な日を送っているうちに病人は次第に悪くなってとうとう亡くなってしまった。病院から引取って形ばかりでも葬式をすませ、妹と姪とを自宅に引取るまでの苦労を今更のように思い浮べてみる。

殺風景な病室の粗末な寝台の上で最期の息を引いた人の面影を忘れたのでもない、秋雨のふる日に焼場へ行った時の佻しい光景を思い起さぬでもないが、今の平一の心持にはそれが丁度覚めたばかりの宵の悪夢のように思われるのである。

妹を引取って後も、郷里との交渉やら亡き人の後始末やらに忙殺されて、過ぎた苦痛を味わう事は勿論、妹や姪の行末などの事もゆるゆる考える程の暇はなかった。妻と下女とで静かに暮っていた処へ急に二人も増したのみならず、姪はいたずら盛りの年頃ではあり、家内は始終ゴタゴタするばかりでほとんど何事も手につかぬような有様であった。それがどうやら今日までで一先ず片付いて妹はともかく国の親類で引取る事になった。それで今朝汽車が出てしまつて改札口へ引返すと同時に、なんだか気抜けがしたように、プラットホームの踏心も軽く停車場を出ると空はよく晴れて快い日影を隠す雲もない。久し

振りに天氣のよい日曜である。宅へ歸つてどうすると云うあてもないので、銀座通りをぶらぶら歩き、おおだな大店のガラス窓の中を覗いてみたり雑誌屋の店先をあさってみたり、しばらくはほとんど何事も忘れていた。京橋から電車に乗つてこの片隅へ腰を下ろしてから始めて今朝の別れを思い起し、それからそれとこの間中の事を繰返してみる。薄情冷酷と云うではないが、にが苦しいや鋭い悲しみも一日経てば一日だけの霞がかかる。今電車の窓から日曜の街の人通りをのどかに見下ろしている刻下の心持はただ自分が一通りの義務を果してしまつた、この間中からの仕事が一段落をつげたと云うだけの単純な満足が心の底に動いているので、過去の憂苦も行末の心配も吉野紙を距へだてた絵ぐらゐに思われて、ただ何となく寛くわろいだ心持になつてゐる。

すぐ向うの腰掛には会社員らしい中年の夫婦が十歳くらいの子を連れておおかただんごさか団子坂へでも行くのだろう。平一はこの会社員らしい男を何処かで見たとように思つたがつい思い出せない、向うでも時々こちらの顔を見る。細君の方は子供の帽子を気にして直しているが、子供はまたすぐに阿弥陀あみだにしゃくり上げる。子供の顔はよく両親に似ている、二人のまるでちがつた容貌がその児の愛らしい顔の中ですっかり融和されてしまつてどれだけが父親、どれだけが母親のと見分けはつかぬ。児の顔を見て後に両親を見くら

べるとまるでちがった二つの顔がどうやら似通にかよつて見えるのが不思議である。姪はあまり両親には似ないで却つてよく平一に似ていると妹が云つた事も思い出した。妹婿は日曜などにはよく家内連れで方々へ遊びに出た。達者で居たら今日あたりはきつと団子坂へでも行つてゐるだろうと思う。妹は平一が日曜でも家に籠つて読書してゐるのを見て、兄さんはどうしてそう出嫌いだらう、子供だつてあるではなし、姉さんにも時々は外の空気を吸わせて上げるがいいなどと云つた事もある。こんな事を思い出しては無意味に微笑してゐる。

向うの子供づれは須田町すだちようで下りた。その跡へは大きな革靴かばんを抱えた爺と美術学校の生徒が乗つてその前へは満員の客が立ち塞がつてしまふ。窮屈さと蒸むされた人の氣息とで苦しくなつた。上野へ着くのを待ち兼ねて下りる。山内へ向かう人数につれてぶらぶら歩く。西洋人を乗せた自動車かけたたましく馳け抜ける向うから紙細工の菊を帽子に挿した手代てだいらしい二、三人連れの自転車が来る。手に手に紅葉の枝をさげた女学生の一団が目につく。博覧会の跡は大半取り崩されているが、もとの一号館から四号館の辺は、閉鎖したままで残つてゐる。壁はしみに汚れ、明り取りの窓硝子ガラスはどこどこ破れ落ちかかつて煤すすけてゐる。おおかた葉をふるうた桜の根には取りくずした木材が乱雑に積み上げられて、壁土

が白く散らばった上には落葉が乱れている。模造日本橋は跡方もなくなつて両側の土堤も半ば崩れたのを子供等が駆け上り駆け下りて遊んでいる。観覧車も今は藪げきとして鉄骨のペンキも剥げて赤鏽あかさびが吹き、土台のたたきは破れこぼちてコンクリートの砂利が喰はみ出している。殺風景と云うよりはただ何となくそぞろに荒れ果てた景色である。

平一は今年の夏妹夫婦と姪とで夜の会場へ遊びに来た事があつた。姪の望むままに一同で観覧車に乗り高い杉の梢の夜風に吹かれた。あの時の楽隊の騒がしい喇叭らうぱのはやしはまだ耳に残っている。そこらの氷店へはいつて休んだ時には、森の中にあふるる人影がちらついて、赤い灯や青い旗を吹く風も涼しく、妹婿がいつもの地味な浴衣をくつろげ姪にからかいながらラムネの玉を抜いていた姿がありあり浮ぶ。あの時の氷店の跡などももうたしかに其処そことも分らぬ。平一は過ぎた一夜の事をさながらに一幅の画のように心に描いてみる。

図書館の前から上野も奥へ廻ると人通りは少ない。森の梢に群れていた鴉からすの一羽立ち二羽立つ羽音が淋しい音を空に引く。今更らしく死んだ人を悲しむのでもなく妹の不幸を女々めしく悔やむのでもないが、朝に晩に絶間のない煩いめに追われて固く乾いた胸の中が今日の小春の日影に解けて流れるように、何とという意味のない悲哀の影がゆるんだ平一の心の

奥底に動くのであった。

宅へ帰ってみると妻は用達ようたしに出たらしい。下女はちよつと出迎えたがすぐ勝手へ引込んで音もない。今朝まであんなに騒々しかった家内はしんとしてあまりに静かである。平一は縁側に立つたまま外套も脱がず、庭の杉垣まばゆに眩い日光を見ていたが、突然訳の分らぬ淋しさに襲われて座敷へはいった。机の前に坐つて傍の障子を見ると、姪がいつの間にか落書したのであろう、筆太に塗りつけた覚束ない人形の絵が、おどけた顔の横から両手を拵こげている。何という罪のない絵だろうとしばらく眺めていたが、名状の出来ぬ暗愁が胸にこみあげて来て、外套のかくしに入れたままの拳を握りしめて強く下唇をかんだ。

程近い踏切を過ぎる汽車の響がしてまたもとの静かさにかえる。妹等はもう何処らまで行つたかと思つて手近い旅行案内を取り上げてみた。

(明治四十一年一月『ホトトギス』)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1985（昭和60）年7月5日第3刷発行

初出：「ホトトギス 第十一巻第四号」

1908（明治41）年1月1日発行

※初出時の署名は「藪柑子」です。

入力：Nana ohbe

校正：松永正敏

2004年3月24日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

障子の落書

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>